

小泉八雲とモラエスの比較研究

田 中 正 志

〈序〉

Lafcadio Hearn (1850~1904) は日本名を小泉八雲として広く知られ、「怪談」をはじめとして多くの作品が英語の教材として使用され、日本人にはよく知られた作家である。

一方、モラエス Wenceslau de Moraes (1854~1929) はポルトガルのリスボンに生まれ、幾多の経歴を重ねた後、日本に関心を持つようになって来日、神戸でポルトガルの副領事、総領事を歴任、その後退職し、日本人の亡妻、福本ヨネの郷里・徳島に居住し、文筆生活に入り、終生母国のポルトガルに帰らず、1929年、徳島で75才の生涯を終える。

モラエスは日本に33年間、生活したことになるがそのうち17年間を徳島で生活し、徳島のハーンと称された。

平成17年度、日本英学史学会、九州支部大会で「モラエスと彼の紹介者花野富蔵について」を発表したので、この稿では松江のハーンと徳島のハーンと称された、モラエスを比較検証し、日本を国外に発信した両者を考察する。

〈一〉

ハーンは1850年にギリシャで生まれ、アイルランド、英国、ウェールズにて成人。1869年、アメリカに渡り、印刷人及び新聞記者となり、ニューオルリアンス新聞の文学部主筆となる。そしてニューオルリアンスにて当時ニューオルリアンス博覧会の事務官の服部一三氏に出会う。1887年より1889年まで

仏領西印度のマルティニークに滞在。1890年、ハーパー兄弟書肆より日本に派遣される。当時の文部省、普通学務局長、服部氏の好意により、出雲松江の尋常中学校に於て英語教師の地位を得、1891年の秋熊本に赴き、第五高等中学校に教えて1894年に到る。1894年、神戸に赴き「神戸クロニクル」の記者となる。1895年、日本臣民となる。1896年、東京帝国大学に招かれて講師となり、1903年まで英文学の講座を担当す。その間6年7ヶ月。日本に関する著書11部あり。

以上は田部隆次著「小泉八雲」の第一章にハーンが早稲田大学のために書いた簡単な履歴書である

ハーンの父 Charles Bush はアイルランド人（当時は英国籍）でギリシャ駐在の英国陸軍軍医。母 Rosa Tessima は国籍も正確に分らずいろんな説が伝えられているがギリシャ人であるというのが一般の説である。

ここで、ハーンの年譜を紹介することにする。

1850年（嘉永3年）

6月27日、ギリシャのイオニア群島の一つサンタ・モウラ島（現在のレフカス島）リュウカディア（現在のレフカダ）の町で生まれる。父チャールズ・ブッシュ・ハーンはアイルランドの人（当時は英国籍）でギリシャ駐在の英国陸軍軍医補、母ローザ・アントニオ・カシマチはギリシャ人でセリゴ島の旧家の娘である。

1852年（嘉永5年）2歳

ローザとハーンは、マルタ島を経由して8月1日、ダブリンの父の実家に到着。

1853年（嘉永6年）3歳

10月8日、父チャールズ、グラナダから帰国、ダブリンに到着。翌日、再会した一家は食卓を囲む。その夜、チャールズとローザの間に激しいいさかひがあった。

次第に母ローザは精神不安定になり、子供に当たったり、暗く沈むことが多くなった。大祖母でカトリック教徒の未亡人サラ・ブレナンのもとで暮らすことが多くなる。

1854年（嘉永7年、安政元年）4歳

4月21日、チャールズ、クリミア戦争に参加するため、ポーツマスを出航する。

初夏、母ローザはハーンをブレナンに預け、セリゴ島に帰る。8月12日、弟ダニエル・ジェームス・ハーン生まれる。

1855年（安政2年）5歳

父母と離れて、大叔母ブレナンのもとで生活する。

1857年（安政4年）7歳

父チャールズはローザとの結婚無効を申し立て、アルシア・ゴスリンと結婚式を挙げる。

8月、チャールズは新妻を連れて、インドに赴任する。

1859年（安政6年）9歳

ブレナンと遠縁のヘンリー・モリヌークスの親密な交際が始まる。

1860～1862年

この頃、祖母エリザベス、叔母キャサリン・エルウッド・義母アリシア、叔父ロバートらが死去する。

1863年（文久3年）13歳

2月、結婚したヘンリー・モリヌークスは、サリー州レッドヒルに構えた邸宅にブレナンを呼んで住むようになった。それに伴い、ハーンもヘンリーたちと暮らすことになった。

9月、ダラム市郊外ウショーにある聖カスパート校に入学する。

1864年（元治元年）14歳

学校ではいつも「パディ」とばれていた。家族のこと、住まいのことを語りたがらない少年だった。

1865年（元治2年、慶応元年）15歳

「ジャイアンツ・ストライド」と呼ばれるゲームで、飛んできたロープの結び目で左眼を打つ。ダブリンで手術をするが失敗し、左眼を失明する。11月21日父チャールズ、病気のためインドより帰国途中、船上で死去、水葬される。

1867年（慶応3年）17歳

大叔母サラ・ブレナン破産のため、聖カスパート校中退、一時期フランスにいたらしい。

1869年（明治2年）19歳

古い召使いキャサリン・デラニーを頼ってロンドンに出た後、初夏の頃、リ

バプール港から移民船に乗りニューヨークに渡る。さらに汽車でモリヌークスの親戚がいるというシンシナティに向かう。シンシナティへ来て数ヶ月経った頃、終生の知友となる印刷屋ヘンリー・ワトキンと出会う。

1870年（明治3年）20歳

ユニテリアン教会の牧師トマス・ヴィカーズの私的秘書としてフランス語の翻訳などにあたる。しばしばボストンの週刊誌「ボストン・インベスティゲーター」に投稿する。

1871年（明治4年）21歳

1月13日、サラ・ブレナン卒中のためトレモアで死去する。

1872年（明治5年）22歳

「シンシナティー・トレイド・リスト」誌創刊に当たって、編集者レオナード・バーニーの編集助手となる。11月、「シンシナティ・インクワイアラー」紙の有力な寄稿者となる。

1874年（明治7年）24歳

インクワイアラー社の正式社員となる。またこの頃、競争紙「ガゼット」の記者ヘンリー・E. クレビルとの交友が始まる。

6月21日、有名な挿絵画家H. F. ファーニーの挿絵とハーンの記事により雑誌「イ・ジグランブス」が創刊される。発行数九号のうち約六十のコラムをハーンが担当する。11月7日、「タン・ヤード事件」起こる。この事件の記事により、記者としての名を確立する。

1875年（明治8年）25歳

6月、（または1874年の6月）黒人女性アルシア・フォーリー（愛称マティ）と結婚。当時の州法に反する結婚であったため、様々な困難を招く。7月、インクワイアラー社を退職し、翌月から「シンシナティ・コマーシャル」紙に寄稿、12月には同社の正規の記者となる。住所はスミス街110番地。

1877年（明治10年）27歳

マティとの関係が決定的な破局を迎え、マティは町を出る。10月、コマーシャル社を退職して、シンシナティを離れる。汽車でメンフィスに行き、そこから蒸気船トムソン・ディーン号でミシシッピー川を下り、ニュー・オリンズへ向かう。10月12日、ニュー・オリンズに着く。パロンヌ街228番地に下宿する。

1878年（明治11年）28歳

クレオールの俗謡の蒐集と翻訳、旧市街の人々の生活の姿を描くこと、東洋や西洋の物語の翻訳に力を注ぐ。困窮の極みの中で、デング熱にかかり、体が

衰弱する。6月15日、ニューオリンズ・アイテム社で副編集者の職を得る。この頃、クレオール文学の先駆者ケイブルと知り合う。フランス文学の翻訳も人々の目を引く。

1879年（明治12年）29歳

バーボン街105番地に移り、お金を貯える。3月2日、なんでも5セントのレストラン「不景気屋」を始めるが、相棒の売上金持ち逃げにより、3月23日には閉店する。毎日のように通ったフランス地区の古書店を中心に文学愛好者との交流が生まれる。ハーン自慢の奇書蒐集は、クレオール文献、東洋関係文献、古代芸術など急速に広がっていく。

1881年（明治14年）31歳

タイムズ・デモクラット社の文芸部長として日曜版を中心に執筆する。アメリカ地区コンスタンス街39番地に移る。

1882年（明治15年）32歳

関心が東洋関係の神話や文学に集中するようになる。4月、「クレオパトラの一夜とその他幻想物語集」（ゴーチュエ著）の翻訳がワシントン社から出版される。

12月、タイムズ・デモクラット社の婦人記者エリザベス・ビスランドを知る。

1884年（明治17年）34歳

6月、「飛花落葉集」オズグッド社より出版される。8月から9月、グランド島に遊ぶ。

12月16日、万国産業綿花博覧会が開かれる。

1885年（明治18年）35歳

1月から2月、ハーバー社のために博覧会の記事を書くことに忙殺される。特に日本館の美術及び教育に関する展示品に強い関心を抱く。医学者高峰讓吉と出会い、また政府派遣の服部一三と緊密な交渉をもつ。「ゴンボ・ゼーブスー・クレオール俚諺集」、「クレオール料理」、「ニューオリンズ及び周辺の歴史スケッチと案内」コールマン社から出版される。

1886年（明治19年）36歳

7月、グランド島を再訪する。

1887年（明治20年）37歳

1月、レオオナ・ケイロウセとの交友が始まる。2月「中国怪談集」（ロバーツ・ブラザーズ社）が出版される。6月、シンシナティ経由でニューヨークへ向かう。7月、バラクータ号で西インド諸島へ出発。マルティニーク島サン・ピエールに腰をすえる。9月、ニュー・ヨークに戻り、10月2日、再びバラクエ

タ号でサン・ピエールに向かう。

1888年（明治21年）38歳

9月、大西洋岸のグランド・アーンズへ徒歩旅行する。ペレー山にも登頂する。

1889年（明治22年）39歳

5月、ニューヨークに戻る。9月、「チターーラスト島の思い出」（ハーパー社）が出版される。10月、実弟ジェームス・ハーンから手紙を受け取る。フィラデルフィアからニューヨークに戻り、友人の家を点々とする。11月、「ハーパーズ・マンスリー」誌美術主任の記者パットンに、日本へ行って日本に関する著述をする場合の具体的な内容を書き送る。

1890年（明治23年）40歳

1月、「シルヴェストル・ボナールの犯罪」（アナトール・フランス著）（ハーパー社）翻訳が出版される。3月8日、画家ウェルドンとニューヨークを出発、日本を目指す。鉄道で大陸を横断し、バンクーバーよりアビシニア号で横浜へ向かう。3月10日、「仏領西インドの2年間」（ハーパー社）出版される。4月4日午前6時、横浜到着。ケアリホテルに荷物を預け、人力車で暗くなるまで神社仏閣をめぐる。4月10日、チェンバレンに会って就職の斡旋を依頼する。4月下旬から五月上旬、旅行記を書く件についてハーパー社と解約する。5月12日、「ユーマ」（ハーパー社）が出版される。7月、東京にて毛利八弥事務官を介して島根県知事籠手田安定と島根県尋常中学校及び師範学校の英語教師に就任する契約を結ぶ。この文書に「ラフカヂオ・ヘルン」と記載されたため、以後、「ヘルン」と呼ばれるようになる。松江着8月30日。尋常中学校教頭西田千太郎らの出迎えを受け、富田旅館に投宿する。以後、西田との友情は終生変わることがない。9月2日、尋常中学校および師範学校に初出校する。9月12日、宍道湖を蒸気船で渡り、人力車に乗り換えて杵築（出雲大社）へ向かう。10月下旬から11月中旬、京店の織原方離れ座敷に移る。

1891年（明治24年）41歳

1月、寒波到来により風邪で臥床し、1月24日まで学校を休む。1月下旬から2月上旬、松江藩士小泉湊の娘セツが住み込みの女中として身の世話をすることになり、やがて同棲、事実上の結婚という関係に発展する。6月22日、土族屋敷根岸千夫方（北堀町315番地）に転居する。7月から8月、出雲大社、日御碕方面、日本海に沿って伯耆方面に旅する。10月4日、チェンバレンから熊本での就職について手紙が届く。11月15日、セツとその家族を伴い、第五高

等学校赴任のため、松江より熊本に向かう。11月24日、第五高等学校で就任式があり、続いて授業を始める。翌日、手取本町34番地に居を構える。

1892年（明治25年）42歳

4月、博多にセツとともに旅をする。7月16日、博多－神戸－京都－奈良－隠岐－美保関とセツとともに約2ヶ月間の大旅行する。11月、坪井西堀端町35番地に移転する。

1893年（明治26年）43歳

1月から3月、セツに英語のレッスンをする。7月、長崎小旅行をする。11月17日、長男一雄が生まれる。

1894年（明治27年）44歳

4月、養母も入れて家族4人で金毘羅参りに出かける。

7月8日、東京に単身出発する。チェンパレンの留守宅に逗留し、メイスン一家とも交流を深める。9月29日、「日本警見記（知られぬ日本の面影）」（ホートン・ミフリン社）が出版される。10月上旬、神戸クロニクル社へ転職のため、門司から海路で神戸に向かう。10月11日よりほぼ毎日論説を書く。この頃、下山手通4丁目7番地に移転する。12月14日頃、眼の炎症で倒れ、執筆できなくなる。1ヶ月ほど、暗い部屋で眼に湿布を当てて横になっている。

1895年（明治28年）45歳

1月30日、神戸クロニクル社を退職する。3月9日、「東の国から」（ホートン・ミフリン社）が出版される。

〔日清講和条約調印〕

4月、京都へ家族で旅行する。7月、山手通6丁目26番地に移転する。10月23日、京都遷都千百年祭の見物に行く。12月13日付の外山正一の手紙が帝国大学への招聘の意思を伝える。ハーンはそれを受諾する。

1896年（明治29年）46歳

2月10日、帰化手続きが完了し小泉八雲と改名する。2月、伊勢に家族旅行する。

3月14日、「心」（ホートン・ミフリン社）が出版される。6月26日、セツ、一雄とともに松江、美保関、杵築を訪ね、8月23日に神戸に戻る。9月8日、帝国大学文科大学講師として奉職のため、セツと東京に到着する。9月28日、牛込区市ヶ谷富久町21番地に住む。

1897年（明治30年）47歳

2月15日、次男巖が生まれる。3月5日、西田千太郎が死去する。8月11日、

焼津に逗留し水泳を楽しむ。9月25日、「仏の田の落穂」(ホートン・ミフリン社)が出版される。

1898年(明治31年)48歳

前年夏ごろから始まったマクドナルドとの交友がさらに深まり、急速に親密な間柄となる。4月、フォノロサとの交流が復活し、夫人メアリーに「仏の田の落穂」を贈る。8月、家族とともに鶴沼に滞在し、水泳を楽しむ。マクドナルドや雨森信成らも訪れる。8月10日、「猫を描いた男の子」(長谷川縮緬本)が出版される。12月8日、「異国風物と回想」(リトル・ブラウン社)が出版される。

1899年(明治32年)49歳

4月10日、「妖怪蜘蛛」(長谷川縮緬本)が出版される。4月13日、「クラリモンド」(ゴーチェ著)(プレントナーノ社)翻訳が出版される。5月上旬、脚気になり、瘤寺(自証院円融寺)や禅寺道林寺などへの散歩が出来なくなる。8月、一雄を連れて焼津に逗留する。9月26日、「霊の日本」(リトル・ブラウン社)が出版される。12月20日、三男清が生まれる。

1900年(明治33年)50歳

1月、マクドナルド離日、一方でビスランド(ウェットモア夫人)との文通が再開する。

3月8日、外山正一が死去する。7月24日、「明暗」(リトル・ブラウン社)が出版される。8月、一雄と焼津に逗留する。

1901年(明治34年)51歳

6月頃、セツの遠縁にあたる三成重敬に会う。以後、良きアシスタントとなる。7月、一雄を連れて焼津に逗留する。10月2日、「日本雑記」(リトル・ブラウン社)が出版される。

1902年(明治35年)52歳

3月19日、西大久保265番地に移転する。5月8日、ペレー山が大爆発し、サン・ピエールの町滅亡の報を聞く。6月1日、「団子をなくしたお婆さん」(長谷川縮緬本)が出版される。8月、一雄と焼津に逗留する。10月22日、「骨董」(マクミラン社)が出版される。12月、喉から出血、談話が禁じられ、講演、講義による生活に大きな不安を憶える。

1903年(明治36年)53歳

1月15日付け、文科大学長名義で解雇通知が郵送される。3月、学生たちの大学への抗議もあり、井上學長より時間と俸給を半減して留任するように請われるが、拒否する。3月15日、「ちんちん小袴」(長谷川縮緬本)が出版される。

3月31日、東京大学講師を退職する。9月10日、長女寿々子が生まれる。

1904年（明治37年）54歳

{日露戦争始まる}

3月26日付けで、ロンドン大学より「日本の文明」についての十回連続講演を依頼される。4月2日、「怪談」（ホートン・ミフリン社）が出版される。4月29日、八雲の「教員認可願」が履歴書を添えて、早稲田大学より文部省に送達される。8月、一雄、巖を伴い焼津に逗留する。9月19日、午後3時、最初の心臓発作が起こる。

9月26日、夕食後、午後8時、再び発作を起こし、間もなく息を引き取る。

9月30日、瘤寺で仏式による葬儀がいとなまれ、雑司が谷の墓地に葬られる。法名正覚院殿浄華八雲居士。

次にハーンの作品について、年譜の中で紹介されていますが年代順に列挙すると、

「知られざる日本の面影」	1894年 Climpse of Unfamiliar Japan(Boston and New York : Houghton, Mifflin & Co. 以下、HM. と略記) 上下2巻
「東の国から」	1895年 Out of the East (HM.)
「心」	1896年 Kokoro (HM.)
「仏の畑の落穂」	1897年 Gleanings in Buddha - Fields (HM.)
「異国風物と回想」	1898年 Exotics and Retrospectives (Boston : Little, Brown & Co. 以下、LB. と略記)
「霊の日本」	1899年 In Ghostly Japan (LB.)
「影」	1900年 Shadowings (LB.)
「日本雑録」	1901年 A Japanese Miscellany (LB.)
「骨董」	1902年 Kotto(New York : Macmillan Co.)
「怪談」	1904年 Kwaidan (HM.)
「日本 一つの解明」	1904年 Japan : An Attempt at Interpretation (New York : Macmillan Co.)
「天の河奇譚 その他」	1905年 The Romance of the Milky Way and Other Studies and Stories (HM.)
「カルマ」A. モーデル編	Karma (Albert Modell ed ; New York : Boni & Liveright)

(二)

Wenceslau José de Moraes (1854~1929) は19世紀半ば1854年5月30日にポルトガルの首都リスボンで生まれた。

父母及び5才年長の姉エミリアと3才下の妹フランシスカとの三人兄弟。モラエスが17才の時に父親を亡くし、1875年、海軍士官学校を卒業し、ポルトガル海軍少尉に任官する。

モラエスは文才に恵まれ、当時ポルトガルの植民地であったアフリカのモザンビークや中国のマカオに赴任しながら『極東遊記』をはじめ、多くの随筆をリスボンの新聞に発表しはじめるが、それが文筆家としてのモラエスの出発点となる。

1889年はモラエスが日本とはじめて接触した年である。

モラエスが副官として砲艦「リオ・リマ」に乗船し、中国北部及び長崎、神戸、横浜を訪れ日本に魅了される。

モラエスを日本に決定的に結びつけたのは1897年に出版された「大日本」であることは間違いないし、モラエスの文筆家としての名声を確固たらしめ、この作品の成功がモラエスをして日本移住の決意に影響を及ぼしたことも間違いない。

マカオ港港務副司令官を最後にポルトガル海軍を退役し、1899年、神戸・大阪ポルトガル領事事務取扱に就任する。

モラエスはその頃、徳島出身の福本ヨネと出会い、神戸で10年ほど生活を共にしたが、1911年、ヨネ死亡。1913年、神戸ポルトガル総領事を辞し、徳島へ隠棲し、ヨネの姪である斉藤コハルや斉藤家の人々と親交をもちつつ市井に暮らす。

徳島県立図書館にはモラエスの22の著作が所蔵されており、モラエスそれらによって日本を海外に紹介している。

モラエスの作品はポルトガル語で書かれ、外国で出版されたため、当時はそれほど高い評価を受けなかったが、死後、著作が花野富蔵らによる翻訳、

出版されるのに伴い、評価が上昇する。

モラエス年譜を紹介し、より詳細を考証する。

1854年（安政元年）

5月30日、ポルトガル・リスボン市トラヴェサ・ダ・クルス・ド・トレル4番地の旧家に生まれる。市の中心を成すアヴェニダ・ダ・リベルダディの東手、カルサダ・ド・ラヴラをのぼりつめたところ。父はヴェンセスラウ・ジョゼ・デ・ソーザ・モラエス、母はマリア・アマリア・デ・フィゲイレド・モラエス。両親はいとこ同士。モラエス家には長男に代々同じ名前をつける習慣があった。五歳年長の姉エミリアがいた。

1857年（安政4年）3歳

3月1日、妹フランシスカ生まれる。

1865年（慶応元年）11歳

手製の家庭新聞を発行する。この頃、リスボン市ファンケイロス通りにあったサント・アゴスティニョ小学校に通っていた。

1871年（明治4年）17歳

8月29日、陸軍歩兵第五連隊に志願兵として入隊。この前後に父が死亡。

1872年（明治5年）18歳

9月25日、海軍特別見習士官となる。この頃、ラウラ・デ・アレンケルなる少女に恋するが、彼女は応えない。

1873年（明治6年）19歳

10月10日、理工科学校内に設けられた海軍兵学校の予科を修了。この頃、マリア・イザベル・ドス・サントスが夫と姑とともにモラエス家の階下に住まいはじめる。

1874年（明治7年）20歳

7月13日、第一学年を修了し、練習航海に出る（2ヶ月10日）

1875年（明治8年）21歳

7月2日、海軍兵学校全課程を修了。10月2日、同期生13名中九位の成績で海軍少尉に任官。

1876年（明治9年）22歳

1月10日、短編「屋根裏の秘密」執筆。3月20日、教育航海のため輸送船「インディア」に転属。4月3日、米国フィラデルフィアで開催される万国博覧会

への出品物と関係者を運ぶためリスボンを発つ。

1877年（明治10年）23歳

1月11日、「アフリカ」、アンゴラに向け出航。2月2日、ルアンダに到着。
2月8日、ルアンダ出航、喜望峰を経て、3月5日、ローレンソ・マルケスに到着（第一回モサンビーク勤務）。

1878年（明治11年）24歳

4月、コルヴェット鑑「ミンデロ」に転属、主として奴隷密貿易取締にあたる。

1879年（明治12年）25歳

1月、「ミンデロ」、ローレンソ・マルケス湾に再度出動。この頃、マリア・イザベル・ドス・サントスとの文通はじまる。3月10日、「セナ」に移る。8月9日、帰国のため輸送船「アフリカ」に移り、スエズ経由で、11月24日、帰国。マリア・イザベルとの関係深まる。

1880年（明治13年）26歳

2月12日、中尉に昇進。4月、マリア・イザベルとモラエスの家族がもめる。

1881年（明治14年）27歳

6月6日、「ミンデロ」でモサンビークに向かう。9月17日、マリア・イザベル、男子を死産。

1882年（明治15年）28歳

7月22日、リスボンの母マリア・アマリア、脳卒中の発作で倒れる。8月12日、「ミンデロ」、トゥンゲ湾に出動。

1883年（明治16年）29歳

5月28日ザンジバルに向かう。7月17日商船「アシリア」で帰国の途につく。

1884年（明治17年）30歳

9月、マリア・イザベル、モラエスの家族との軋轢を避け転居。12月、姉エミリアがアントニオ・フランシスコ・ダ・コスタと結婚。

1885年（明治18年）31歳

3月14日、東アフリカ・インド洋分隊所属砲艦「リオ・リマ」の副官に任命される。3月23日、郵便船「ガース・キャスル」でモサンビークに向かう。5月20日、母アマリア死亡。7月15日、「リオ・リマ」副官として、モサンビークからマカオに向かう。

1886年（明治19年）32歳

1月13日、リスボンに帰着。60日間の病気休暇を与えられる。4月30日海軍

大尉に昇進。8月22日、甥ジョアキン（姉エミリアの長男）誕生。8月24日、砲艦「ドーロ」に配属。

1887年（明治20年）33歳

1月23日、「ドーロ」、ザンジバルとの国境紛争にからんで兵力増強のため同海域に出動。5月3日、州保健委員会の意見により帰国のため下船。

1888年（明治21年）34歳

2月9日、復縁を求めるモラエスに、マリア・イザベルから拒否の返事。マカオに赴任。3月30日、輸送船「インディア」でリスボンを發つ。7月7日、コロンボ、シンガポールに寄港のちマカオ着。7月8日、「リオ・リマ」に副官として配属される。7月14日、艦の修理のため香港に行き、同地に10月28日まで滞在。この頃、デンマーク人男性と中国人女性とのあいだに生まれた亜珍を契約妻のようなものにする。亜珍は14歳であった。

1889年（明治22年）35歳

6月20日、「リオ・リマ」中国北部と日本諸港巡航のためマカオ出航。8月4日、長崎に入港する。神戸、横浜に立ち寄り長崎、上海を経て、9月14日、マカオ着。12月31日、砲艦テジョ号に転属。

1890年（明治23年）36歳

3月3日、テジョ号の臨時艦長になる。4月20日、マカオを發ち、バンコクに向かう。

1891年（明治24年）37歳

3月1日、長男ジョゼ誕生。3月末をもってマカオでの任務は満了する。4月11日、マカオを出航。帰国の途につく。8月22日、リスボンに入港。10月26日、マカオ港港務副司令官に任命される。10月29日、少佐に昇進。12月22日、マカオ港港務副司令官としてマカオにいた。12月30日、阿片輸出入取締監督官に任命される。この頃、600バタカで亜珍を身請けする。

1892年（明治25年）38歳

1月、マカオ中心部トラヴェサ・ダ・ミゼリコルディアに転居する。9月1日、次男ジョアン誕生。

1893年（明治26年）39歳

4月、セミナリオ・デ・サン・ジョゼの教授に任命される。6月3日、兵器購入のため日本出張を命じられる。11月30日、国立マカオ・リセ教授に任命される。12月30日、中佐に昇進。

1894年（明治27年）40歳

2月3日、阿片輸出入取締監督官辞任。日本出張を命じられ7月4日、マカオを発つ。

1895年（明治28年）41歳

7月6日、90日間の病気休暇をとるが9月7日に出勤、残りの休暇取り消す。「極東遊記」がリスボンで出版される。

1896年（明治29年）42歳

7月10日、亜珍名義でマカオの家屋を購入。7月27日、新船用兵器を日本で購入するよう命じられ、7月29日、マカオを発つ。

1897年（明治30年）43歳

2月1日、マカオ港港務司令官アルバノ・アルヴェス・ブランコ大佐解任され、アントニオ・タロネ・ダ・コスタ・イ・シルヴァ少佐が新司令官に任命される。この人事異動を日本滞在中に知ったモラエスは、中佐の自分を飛び越して少佐が任命されたことに一大ショックをうけ、何とんでもマカオの港務副司令官のポストには戻るまいと決意し、神戸領事に任命されるように運動しはじめる。6月23日、外交使節の書記官に任命さる。7月10日、「大日本」がリスボンで出版される。7月14日、京都御所で天皇陛下に拝謁。

1898年（明治31年）44歳

6月8日、神戸領事任命問題が進展しないことに苛立ったモラエスは、状況を正確に把握するために、また亜珍母子の処遇について検討するためマカオに戻る。11月22日、神戸大阪ポルトガル副領事館臨時運営を命じられる。

1899年（明治32年）45歳

5月12日、神戸大阪ポルトガル領事事務取扱に就任する。6月、「ポルト商報」社主ベント・カルケジャ訪日。9月29日、神戸大阪ポルトガル領事認可状下付され、正式に領事となる。

1900年（明治33年）46歳

5月13日、領事事務取扱就任一周年を記念して、宇治に一泊旅行する。この頃、おヨネと知り合い、11月、同棲をはじめる。

1902年（明治35年）48歳

5月24日、兵庫県庁の落成式に出席。6月20日、イタリア領事兼任。

1903年（明治36年）49歳

3月1日～7月31日、第五回内国勸業博覧会が大阪で開催され、モラエスの奔走によりポルトガル物産が展示された。4月10日、神戸港で日本海軍の大観

艦式。

1904年（明治37年）50歳

2月10日、日本、ロシアに宣戦布告し、日露戦争始まる。9月26日、ラフカディオ・ハーン、東京で病没。この年「日本通信 第一集」がポルトで出版される。

1905年（明治38年）51歳

3月、リスボンで、姉エミリア死亡。9月21日、息子ジョゼとジョアン、マカオで受洗。この年、「茶の湯」が神戸で自費出版される。「日本通信 第二集」がポルトで出版される。

1906年（明治39年）52歳

この年、「中国・日本風物誌」がリスボンで出版される。。

1907年（明治40年）53歳

11月、京都末慶寺をはじめて訪れる。この年、「日本の生活 通信第三集」がポルトで出版される。

1908年（明治41年）54歳

11月8日、日本艦隊観艦式に招かれる。この頃、リスボンの甥ジョアキン結婚。

1909年（明治42年）55歳

10月ごろ、城崎温泉を訪れる。

1910年（明治43年）56歳

7月5日、巡洋艦「サン・ガブルエル」、神戸寄港（11月まで）。7月8日、全士官、日本人高官らを料亭「常盤花壇」に招待する。

1911年（明治44年）57歳

7月以降、マカオから給与の送金とだえる。11月12日、末慶寺宗祖七百回忌に招待される。

1912年（明治45年）58歳

7月30日、明治天皇崩御。

1912年（大正元年）

8月20日、ヨネ死亡（享年38歳）。9月はじめ、神戸市内の山本通り2丁目より加納町に転居。9月21日、第四級神戸ポルトガル総領事に任命される。このころ、永原デン、モラエス邸で奉公。

1913年（大正2年）59歳

4月17日ごろ、徳島にヨネの墓を見に行く。6月10日、本国大統領に宛てて、

神戸ポルトガル領事辞任および海軍軍籍離脱を願い出る。ポルトガル領事事務を引き継いだメキシコ領事の報告によれば、6月30日に引き継ぎをすませ、7月1日に徳島に向かった、という。7月12日、総領事辞任願い受理される。7月29日、カタカナの遺書を書く。

1914年（大正3年）60歳

2月、「徳島の盆踊り」を「ポルト商報」に送りはじめる。4月3日、コハルに長男花一生まれるが、まもなく死亡。モラエスの子だったという。

1915年（大正4年）61歳

9月15日、コハルに次男朝一生まれる。

1916年（大正5年）62歳

8月12日、コハル、咯血し入院。10月2日、コハル死亡（享年23歳）。

1918年（大正7年）64歳

10月4日、朝一死亡（享年3歳）。

1919年（大正8年）65歳

6月初旬、亜珍と長男ジョゼが来日。まず亜珍が、続いてジョゼが徳島を訪れ、8日に去る。7月19日、コハルの妹千代子死亡（享年13歳）。8月12日、正式の長文の自筆証書遺言二通を認める。

1921年（大正10年）66歳

10月初旬、フランシスコ・シェダスがモラエスを訪問。

1923年（大正12年）68歳

8月16日、東京外国語学校学生安部六郎がモラエスを訪問。

1926年（大正15年）71歳

この年、神戸時代にリスボンの雑誌「セロンイス」に発表していた短編をまとめた「日本夜話」と「日本精神」がリスボンで出版される。

1927年（昭和2年）73歳

8月、「大阪朝日」、「徳島毎日」などの記者団が訪問。一斉に訪問記を掲載する。この頃、香港から亜珍来徳、5日間滞在。

1929年（昭和4年）75歳

春ごろ、病状悪化。神戸ポルトガル領事シルヴァ・イ・ソーザ夫妻が来徳し、妻が看病にあたりと申し出たが、徳島で生を終わりたいというモラエスの意志がかたく、神戸移転の説得は失敗に帰す。7月1日、自宅で遺体となって発見される。

次にモラエスが日本文化を外国に発信した作品のリストをあげてみる。

徳島県立図書館所蔵資料目録				
I モラエスの著書 (ポルトガル語)				
No	書名	著者	出版社	年
1	Traços do Extremo Oriente ; Siam-China-Japão 極東遊記	Wenceslau de Moraes	Livraria de Antonio Maraia Pereira	1895 1946 1974
2	Dai-Nippon (O Grande Japão) 大日本	〃	Imprensa Nacional	1897 1923
3	Cartas do Japão 1 ; Antes da Guerra (1902-1904) 日本通信 1 戦前	〃	Livraria Magalhães & Moniz	1904
4	O Culto do Chá 茶の湯	〃	Kobe Herald/Gotô Seikô dô	1905
5	Cartas do Japão 2 ; Um anno da Guerra (1904-1905) 日本通信 2 戦中	〃	Livraria Magalhães & Moniz	1905
6	Paisagens da China e do Japão シナ・日本風物誌	〃	Viuva Tavares Cardoso	1906 1938
7	A Vida Japoneza ; Terceira serie de Cartas do Japão (1905-1906) 日本通信 3 日本の生活	〃	Livraria Chardron, de Lello & Irmão	1907
8	O “Bon-odori” em Tokushima ; Caderno de impressões intimas 徳島の盆踊り	〃	Livraria Magalhães & Moniz	1916
9	Ó-Yoné e Ko-Haru おヨネとコハル	〃	Renascença Portuguesa	1923
10	Relance da Historia do Japão 日本歴史瞥見	〃	Maranus	1924
11	Os Serões no Japão 日本夜話	〃	Portugal-Brasil	1926
12	Relance da Alma Japoneza 日本精神	〃	〃	1926
13	Cartas do Japão 2 a. serie : 1 (1907-1908) 日本通信第2集 1	〃	〃	1928

14	Cartas do Japão 2 a. serie : 2 (1909-1910) 日本通信第2集2	〃	〃	1928
15	Cartas do Japão 2 a. serie : 3 (1911-1913) 日本通信第2集3	〃	〃	1928
16	Osoroshi おそろし	〃	Casa Ventura Abrantes	1933
17	Fernão Mendes Pinto no Japão 日本における フェルナオ・メンデス・ピント	Wenceslau de Moraes	Graticas de Bertrand	1942
18	Cartas íntimas de Wenceslau de Moraes モラエスの内輪への手紙	〃	Empresa Nacional de Publicidade	1944
19	Páginas Africans ; Antologia Tropical アフリカ覚書	〃	Editorial Cultura	1952
20	Lembranças do passad & menórias da minha vida 過去の思い出と我が人生の記録	〃	[]	1954
21	Cartas ao seu amigo Polycarpo de Azevedo ; escritas em Tokushima entre 1914 e 1927 ボルカルポ・デ・アゼベドへの 書簡集	〃	Arnalde Henriques de Oliveira	1961
22	Antologia 作品集	〃	Vega	1993

〈三〉

日本では「怪談」「東の国から」の作品でよく知られているハーンは英語教師であり、日本文化紹介者、文明批評家で上記の年譜で紹介したように1850年にギリシャで生まれ、一方、モラエスは1854年、ポルトガルで生まれ、ハーンの来日は1890年でモラエスの来日は1889年で二人はほぼ同時期に日本の土を踏む。

ハーンとモラエスの違いは日本滞在期間がハーンの14年間に対してモラエスは約30年間と長い。

さらに二人の決定的な違いは松江藩士、小泉湊の娘セツと結婚し、5年後には帰化手続きし、小雲八雲と改名し、4人の子供の親となり、旧制松江中学、師範学校、旧制第五高等学校、東京帝国大学、早稲田大学で英語教師として教鞭をとり、且つ、幾多の作品の作家として活躍し、1904年、心臓発作のため急逝する。54才であった。

一方、モラエスはポルトガルの首都リスボンで生まれ、海軍士官学校を卒業し、ポルトガル海軍少尉に任官した。

モラエスの文才は当時ポルトガルの植民地であったアフリカのモザンビークや中国のマカオに赴任しながら「極東遊記」「大日本」等、多くの随筆を発表することで発揮される。

マカオ港の港務副司令官を最後にポルトガル海軍を退役し、1899年、神戸・大阪ポルトガル領事事務取扱に就任する。そこで徳島出身の福本ヨネと出会い、神戸で生活を共にしたが、1911年、ヨネ死亡。1913年、神戸ポルトガル総領事を辞し、ヨネの郷里、徳島へ隠棲し、ヨネの姪、コハルと生活を共にするが、そのコハルも他界し、その後、終生徳島でヨネとコハルの二人の潮音寺の墓地に日参した。

以後、一人暮らしの孤独の晩年を送りヨネとコハルの墓参と著述三昧の生活だったが次第にさまざまな老人病にかかり、75才で酒に酔い、土間に転落、脳震盪を起こして悲しい死をとげる。

ハーンとモラエスは同時代を生きたが興味深いことに日本に在住しながら二人には面識がないことである。

モラエスはハーンをジャーナリスト、日本文化紹介者、文明批評家として尊敬し、崇拝していたのは確かで、モラエスはハーンについて自分の著作の中で言及している。

「なかでも最も勝れていて、深い感性と微妙な天分を持っていたラフカディオ・ハーンはアメリカ、殺風景なアメリカから来た。アメリカでは苦しく貧しい生活を送った。しかし、日本に上陸するやいなや、たち

まち、日本を絶賛して、それに心酔した。日本の女性と結婚して、一家を構え、イギリスの国籍を日本の国籍、ヨーロッパふうの名前を日本の名一小泉八雲に変えた。国内の高等学校や大学で、英語と英文学を巧みに講じた。日本に永住すること約14年、1904年9月、54才で東京で死亡。すでに、アメリカで、特に異国情調を好むとあって、著述「美しい印象記」を出版していたハーンは、日本でも、日本の印象記を14冊ほど著述した。それらの著述はみんな、その運筆でも観察が細かくて穏やかな点でも、感想が深い点でも、驚嘆すべきものばかりである。久しい間、価値以下に評されていたが、今日では評価相当に見なされていて、特有の、洗練された情緒で、イギリス一疑いもなく全文学界一の第一流の現代散文家のひとりと考えられる権利を受けるに至っている。これら14冊はいずれも、日本国民の内生活が集積している小さな額画の驚くべき貯蔵庫、ないしは、風景と習俗や気質、宗教心、古説話、歌謡、この地でよく見かける昆虫などの生物に愛情こめた研究の集積である。最後の著述（遺著は別として）は日本の社会制度に関するもので、それが日本本来のものか外来ものか、旧来の制度や民族の法律の強い影響で、現在作成されたものかといった、権威ある解釈である。

モラエスは上記の記述にあるようにハーンをよく観察していることがよく理解できる。

ハーンの死についてもモラエスの「日本通信Ⅱ」の第19章の中でハーンの若い時の苦しい生活がハーンの肉体をいため病弱になり、人の交流を好まず、神経質で頑固な気質であること等々。

また、ハーンの業績についても感動し、ハーンの日本に関する著作にはすべてがすばらしい文学の宝玉であったと賞賛している。

モラエスはハーンに対して強い憧憬をもち常にハーンを意識していたことも明白であろう。

そうであれば、モラエスの著作にもハーンの影響は必至で、モラエスを評

してハーンの模写、模倣という批判もあることも仕方がないことであろう。

モラエスは徳島に17年間住み、その最晩年を除いて、モラエスがポルトガルでは知られた文筆家であることを徳島の人は知らなかった。薄ぎたない綿入れの袖なしの衣服を着た大男のモラエスを徳島の人々は「毛唐人」とか「西洋乞食」と呼ばれ、モラエスの交流はごく限られた人々である。

神戸の友人コートが時たま訪問する以外は同国人との交際はなく、著作と故国の家族、友人の文通がモラエスの精神の拠りどころであったことは疑いない。

ポルトガルへの帰国の意志も領事として過ごした神戸に移住の意志もなく、「彼は孤愁（サウダーデ）の人だ。あえて祖国を捨て、日本の辺土に清貧の暮らしを続け、遠く故郷を思い、亡き人を追慕し、その悲しみを孤独の中で耐えた日々。サウダーデとは、ポルトガル人だけが持つ民族的心情。生地・レイリアに似た緑の山と青い川のある徳島、異邦人モラエスは恵まれた自然と美しい人情の徳島でのめりこむように生きた、徳島を愛した孤愁の人といえよう」とモラエスを深く知る作家で「孤愁」というタイトルでモラエスの小説を毎日新聞から出版し、モラエスに憑かれた故新田次郎は語っている。

一方、ハーンはアメリカの雑誌社の仕事で来日。しかし、アメリカには帰らず、日本人妻セツと暮らし、英語教師として活躍、また新聞社に職を得て論説を書き、さらに、東京帝国大学で英文学を論じ、学生からの評判もよく、教師としても作家のハーンとしても有名となり、教え子には小山内薫、上田敏、土井晩翠、大谷正信という文学界でその名を知られた人たちである。

ハーンとモラエスを比較するには各々の背景は異なるが日本文化を世界に発信し紹介したことは共通した点であることは疑いの余地はない。

さらに二人に共通したことに、小さな生き物や植物にも霊の存在を認め、自然破壊につながる西洋の機械文明に対して嫌悪感をもつことである。

モラエスは小鳥、犬、猫、イモリ等々も仲間として大切に扱い、生活の中でもこれらの小動物がモラエスの孤独の寂しさをいやし、特に猫は唯一の話し相手であったといわれている。

ハーンの小動物好きは彼の作品にも登場し、自分の家の庭で見かける、カメ、ヘビ、イタチなどの生活ぶりを鮮かに表現している。

モラエスと同様にハーンも猫を愛し、虫の声や蛙にさえ情緒と愛情を感じた。

〈四〉

モラエスは徳島に永住の決意をし、自分の死後については火葬することを希望し、片仮名、ポルトガル語、英文でその旨を書き、階下の壁に貼りつけ、その上を風呂敷で覆っており、ヨネとコハルという二人の女性と共にありたいという願いであったことは疑う余地はない。

しかし、徳島ではスパイの疑いをかけられ、ポルトガル外務省の調査を受けたことはモラエスにとって心外そのものであった。

モラエスが神戸の領事をやめ徳島に隠遁したことは唐突なことだったがだけに、東京のカーネイロ公使にポルトガル外務省は調査を命じる。徳島県は外務省の依頼でモラエスの動静を探らせた。結果としてモラエスは徳島県庁に出頭し、自分の潔白を言及している。

ポルトガル政府がモラエスを疑ったのはポルトガルが政情不安定で革命が頻発していたことがその原因であったことは確かであろう。

当時、隣国スペインに亡命していたパイヴァ・コーセイロはスペインの援助で王党を集めて革命軍を組織し、国境を突破しポルトガルに侵入し、その後20幾年にわたってポルトガルの相継ぐ革命の導火線となった。

その後、王党は政府軍によって鎮圧され、国民の信頼を失い完全に壊滅することになる。

モラエスの不本意なことは上記の王党の残党と関係を疑われ、新聞に「徳島のパイヴァ・コーセイロ」と書かれたことであろう。

結果として、モラエスは調査依頼の事件から、日本の警察の注意人物とされ、日独戦争開始で、徳島市民からも色目鏡で見られるようになる。

モラエスの作品を翻訳し、日本で最初に紹介した花野富蔵はモラエスが60才の時、旧制徳島中学校に入学した秋にはじめて出会い、モラエスに夢中になっていくのだが花野富蔵のモラエス評が的確なものであろうと確信し、花野の言及を要約すると、モラエスは才人よりも凡人を愛し、天才気どりや分別くさい大人より無学の女や無邪気な子供に好感をもつ。

モラエスが愛したヨネとコハルも貧しい家庭の女性であったが優しい心情をもち、真心こめてモラエスに接した。

紺がすりのうえに袖なしを羽織って、冬には足袋、大きな駒下駄をはき、およそ西洋文明とは縁がない田舎者の姿、粗末な日本食をとり、質素な生活をする。

しかし、モラエスは西洋文明の偉大さを認めており、将来、日本は西洋文明を吸収し、独自の文明をつくることができると期待していた。また、異文明を選別し、善悪を判別し、取るものは取り、捨てるものは捨てるすばらしい洞察力がある日本人を信頼していた。

教育の面でも、当時の寺小屋教育の精神が現在の教育に生かされていると称賛している。

〈五〉

ハーンは妻セツと明治25年4月3日から4日にかけて、博多、太宰府を訪れたこともあり、モラエスより広範囲に日本国内に見聞をし、その行先地の印象を記録にとどめている。

モラエスはヨネと12年間、神戸で過し、その死後、徳島に移りヨネの姪コハルと暮らし、そのコハルの亡き後も終生徳島で二人の墓を守り、75才で徳島で死亡する前に遺書を書き人間らしい配慮をしマカオ時代の妻「亜珍」と二人の間にできた二人の息子に遺産の半分即ち現金23,500円（現在の貨幣価値にすると2億数千円）、永原デン（神戸時代の雇女）に8,000円、斉藤ユキに1,500円、500円をヨネ、コハルの菩提を弔うために配分している。

モラエスはハーンと異なることの一つに日本人と結婚したが帰化しなかったことである。最初、神戸を離れる時、ハーンをひたすら敬愛していたモラエスはハーンが住んでいた景色がよく、人情の美しい、ハーンが帰化した松江の出雲に移り住む決心していたがヨネの遺骨が徳島の墓に入ったことで自分の最愛の人の墓守になる決意をし、松江行きを断念し徳島に行き、以後モラエスは孤独になり帰化する必要もなかったのであろう。

一方、どうしてハーンは帰化して小泉八雲となったのか。ハーン研究家の高木大幹氏は平成3年度八雲会総会で講演し次のように述べている。

1870年、英国は繁栄の絶頂に達し、1896年、世界にやっとな顔を出した小国日本にハーンは英国籍を捨てて帰化することになる。

帰化することに依ってハーンのアメリットを考えると

- ① 英国国民が英国から与えられている強力な保護を失う
- ② 領事館税よりはるかに高い税金を払う
- ③ 外国人としての俸給で日本政府に雇われるのは困難
- ④ 英国人としての旅券を失うと自由に好きどころに行けなくなる
- ⑤ 日本国籍を得ても完全に日本人になりきれない場合は孤独になる

上記のような不利にもかかわらずなぜ帰化したのか。研究家の代表的な説を列記する。

- ① 梶谷泰之氏の「へるん先生生活記」に「長男の誕生こそはハーンの運命を決するものであったと一雄氏が言っているように、これはハーンと日本との関係一大転機をもたらした。家庭の幸福を何よりも願うハーンは自分の幼い頃の家庭的不幸、否、むしろ悲惨であったことが身にしみているので、妻子と自分の国籍問題をどうすれば、節子夫人や息子の一雄に幸福であるかと思い迷って、弁護士に相談した結果、帰化することになる
- ② 田部隆次氏の「小雲八雲」で帰化するに至ったのは妻子一族の将来を

思っ、最善の方法であり、妻子の方を英国籍に移すのは気の毒でも
しる自分ひとりだけ帰化した方が簡単であるという考え方。

- ③石一郎氏の「小説小泉八雲」にはセツはセツで子供の身の上を案じ、
また、自分の身の行く末を考えると落着かず、なによりも自分と夫と
の年齢差が大きすぎた。セツからハーンに日本人になってくださいと
思い余った口調で切り出した。セツの立場に視点を置いた主張
- ④小泉一雄氏の「父小雲八雲」には、父は不具者なるが故に大きな諦め
を持っている人であった。系累多き母との結婚も、日本への帰化も、
この諦めからである。とあるが、息子の一雄自身からのものとして、
しかも思わぬ点について、異色とするに足る。
- ⑤金関寿夫氏の「異神の国から」では現在ならともかく、今から一世紀
近くも昔に欧米人として、八雲のようなことをあえてするには勇気が
要ったにちがいない。この人には人種的偏見というものが、かけらも
ない。それは彼の人間的なやさしさ、異国的なものへの憧れなどと
もにその一徹な使命感のようなものから来ていたにちがいない。西欧
人一般が抱いていた東洋に対する西欧優位の偏見を彼はあらゆる形で
打ち破りたかったのであろうとユニークな視点
- ⑥E. スティーブンスン氏は「評伝ラフカディオ・ハーン」で1893年11
月に一雄が生まれたことはハーンに日本人になる決意をさせた。子供
を見ると、未来が恐ろしくなった。唯一の別の方法、すなわち、家族
を英国籍にすることは現実的ではなく、家族はそれを望んでいない。
ハーンは家族はそれを望んでいなかった。家族の境遇を良くするには、
帰化するしかなかった。と家族第一主義。
- ⑦銭本健二・小泉凡両氏共編「ラフカディオ・ハーン年譜」にハーン自
身の年齢や日清戦争直前の排外運動、不安定な地位、居住権などを考
えると、妻子を英国籍に入れることはできなかつたと当時の社会状況
を考慮した意見

高木大幹氏はさらに、ハーンは来日したことによって、逆に西洋への回帰を体験した人であったと主張。

ハーンの知的孤独を慰めてくれたのは西洋文学だった。小泉節子との同棲、結婚、長男一雄の誕生、ハーン自身の日本への帰化はどのように説明すればよいか。

自分が日本人に成りきれない西洋人であることを自覚していた人、西欧への回帰を経験しつつあった人が日本に帰化することがあり得たかという間には高木大幹氏と同様に筆者もあり得たと賛同したい。それはモラエスが自分の全財産を自分と関連した人たちに配分したいと熱望していたように、ハーンも妻子の将来を考えて、自分の遺産を遺族に残したいという日本人特有の家族主義の説が帰化の理由であることに筆者は諸手をあげたい。

〈参考文献〉

- (1) 西野影四郎 「小泉八雲とアメリカ」 丸善名古屋出版 2005
- (2) 田部隆次 「小泉八雲」 北星堂書店 1968
- (3) 林 啓介 「美しい日本に殉じたポルトガル人」 角川書店 1997
- (4) 岡村多希子 「モラエスの旅」 彩流社 2000
- (5) 岡村多希子 「モラエスの絵葉書書簡」 彩流社 1994
- (6) モラエス、岡村多希子訳 「日本精神」 彩流社 1996
- (7) モラエス、花野富蔵訳 「おヨネとコハル」 集英社 1948
- (8) 新田次郎 「孤愁」上, 下巻 毎日新聞社 1999
- (9) モラエス、岡村多希子訳 「モラエスの旅ポルトガル文人外交官の生涯」 彩流社 2000
- (10) 四国放送編集 「異邦人モラエス」 毎日新聞社 1995
- (11) モラエス会 「機関誌 モラエス」No.1~7 徳島県出版文化協会「モラエス」編集委員会 1998~2004
- (12) 八雲会 「小泉八雲記念誌 へるん」 八雲会発行
 秦 敬一 論文「八雲とモラエス—モラエス翁蔵書遺品展覧会陳列品目録」から 28号 1991
 秦 敬一 論文「八雲とモラエス—蛍をめぐって」 29号 1992
 秦 敬一 論文「八雲とモラエス—日本・ポルトガル友好450周年」 30号 1993
- (13) 資料 「モラエスとハーン展」 徳島県立文学書道館発行 2004
- (14) 資料 「21世紀に生きるモラエス」(生誕150年記念事業の記録) モラエス生誕150年記念事業実行委員会発行 2005